

食器計量の意義と方法

宇野 隆夫

はじめに

1. 計量の研究史

2. 食器の分類と計量

3. 計量の方法

おわりに

論文要旨

考古資料が増大するに従い、これを扱う上で計量的分析を行なうことの意義が高まっている。大量の資料を計量することは大変な作業のようではあるが、同種の多くの資料について実測したり撮影したりすることと比べるならば簡単な仕事である。計量という方法を採用することは、報告書の作成においても労力を軽減する手段となるであろう。

本稿は、まず計量の研究史から、これが近代考古学の成立期から存在した基本的な方法の一つであり、一度中断して後に、先学によって継承されてきたものであることを主張した。そして計量を行なうには体系的な分類が必要であること、計量結果は個々の遺物の属性レベルから、一括遺物、遺跡、地域、時代と色々の場で集計することが可能であって、集計から得られた各種の量あるいは組成は多くの目的に用い得ることを示した。多くの目的とは、編年、型式変化の意味、流通、階層性、遺跡や地域あるいは時代の特質の解明等である。そしてこの方法は遺物に限られるわけではなく、遺構を含めて遺跡のあらゆる要素について用いることが可能である。

具体的な計量の方法としていくつかの計算例を比較し、属性レベルを含めて記録を行なうためには、一定量までの一括遺物については個体識別法、大量であったり個々の個性が少なく個体識別が難しい資料については口縁部計測法と破片数計算法を併用することが望ましいことを主張した。また従来の計量例から、破片数のデータを個体数に換算する係数を提示した。

報告書において、統一的な方法による計量結果を記載する習慣が定着したならば、コンピュータが発達した現在、報告書の氾濫を嘆くことはなくなるであろう。なお次には本稿を基礎として、中世食器の階層性の復原を行なう予定である。